

一夏×箒 短編集

まろ@ファース党

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一箒民増えろ……!!!

どうもはじめまして、まろと申します。

普段はツイッター(@ichihou122)に生息しています。

箒ちゃんが好きで、一夏さんと結ばれてほしいと願って日頃から妄想してます。

ほぼ一箒の短編ですがパロディもかきます。

感想には、コメ、アドバイス、みたいISカプ、妄想等ありましたら気軽に記入ください！お待ちしております。

それでは、拙い作品ですが、楽しんでいただければ幸いです！※気まぐれ更新

目次

七夕（前編） | 1

七夕（後編） | 5

二人ずつと、これからも（前編）

19

二人ずつと、これからも（後編）

29

Untitled（前編） | 42

七夕（前編）

「箒は、何の願いを書くんだ？」

一夏に声をかけられた箒は、びくつと震えた。

「む、何にしようか」

「え？何にもないのか？」

「…去年まではあったのだが、今年はないのでな」

そう、去年までは、あった。「一夏に会えますように」毎年毎年心からの願いで、1度も変えたことは無かった。

去年の七夕は

「…」

学校から東の方向へ歩くこと20分、小さなアパートが見える。鍵を開けると驚くくらい片付いていて、清潔すぎる小さな一角が現れる。政府に用意された箒の住まいだ。

といつても、ほとんどの家事は雇用された家政婦がしている。住居も家政婦も二ヶ月経つか経たないかの、慣れた頃に引越しをする。今の住居は、壁も家具も寝具も全て灰色に統一された部屋だった。そこに寝転んでいると自分も人間ではなくただの灰色

になるみたいだ、と箒は感じていた。

今の家政婦は、できる料理の種類が豊富でどれも絶品だったが、今までの家政婦同様に、必要な時以外は話をしようとせず、淡々と家事をこなしては逃げるようにして退勤していった。今日は家政婦が休みらしく、「お弁当を買ってきました」のメモが置いてある。

早速家政婦が買ってきたお弁当をレジ袋から取り出す。その時小さな箱が箒の手に触れた。

(?)

それは、きれいに内装されている赤色の箱だった。開けてみると、小さなケーキが入っていてチョコレートのペンでこう書いてあった。

『箒さん、お誕生日おめでとう(ぎ)ございます』

それは毎年政府からおくられるショートケーキだった。美味しいのに、毎年同じケーキと形で、ついでにメッセージの文字まで毎年同じだった。

…そうか、今日は私の誕生日だったか。

今日が七日だつてことはすっかり忘れていた。七夕のイベントとして学校に笹が飾られたのは一週間も前だったから忘れていてもしょうがない。それに今日は——
「本当に篠ノ之束の居場所を知らないのか？」

「…はい、わかりません」

箒は毎月一回、政府の重鎮と面会（という名の、尋問）がある。大抵束のことについて聞かれる。今日は九時間ぶつとおしで、終わるころには下校時間になっていた。

「はあ、つたく…全く、隠しても意味が無いんだからな」

「…そうですね」

居場所なんて知らん。知っていたら姉さんを「謁見」したいのはむしろこつちだ。箒は心の中で毒づいた。私も今この人が私にしているように、姉さんに問いただしたいことがたくさんある。どうして、ISなんかをつくったのか。どうしてこんな暮らしをしているのか。どうして一夏に会えないのか…

ジワアと熱いものが目の裏に溜まってきた。それを零さないように指で拭き取りながら、箒はふと思った。

姉さんは感じたことないのだろうか…孤独を。

姉さんは、篠ノ之家をバラバラした張本人。だから、いや、だからこそ、孤独に向き合っているのではないだろうか。中学を次々に転校し、学校どころか自宅にまで監視が及んでいる私。しかし、姉さんのように、指名手配犯となれば更に世界中から監視されて、誰にも助けてもらえない状態にあるのだろう。しかし、私は、姉さんの気持ちが変わらない。

昔からそうだった。ずっと前から、姉さんの気持ちはわからない。姉さんは私よりもずっと、世界中の誰よりも頭が良くて、天才で、物心ついてから、ずっと姉さんとは全く似てないことを自覚していた。

だけ…

だけど、この気持ちだけは一緒であってほしい。

離れ離れになる前、姉さんは、私や一夏、千冬さん（その代わり私たち三人以外の人間には興味がないのだが）をととても好いていて、毎日私と一夏をぎゅつと抱きしめてくれた。それは当時、素直に言うとは恥ずかしいが…。とても嬉しいものだった。今も、同じ気持ちで、私たちに会いたいと、抱きしめたいと思っていてほしい。私は正直言って、姉さんを歓迎したくはない。でも会いたい…のかもしれない。そうでなければ私は…

チンッ

無機質な音が一人きりの部屋に響いた。冷え切った弁当が温まった音であった。その音で我に返る。

「いただきます」

箸の声もレンジの音同様部屋中に響き、灰色の壁の向こうに消えていった。

七夕（後編）

「箒？ぼーつとしてどうしたんだ」

箒はハッと意識を取り戻した。そうだ、今は、7月7日、20xx年、ここは篠ノ之神社、そして近くには――箒を心配そうに見つめる一夏の顔。その瞬間、光の速さで箒はのけ反った。

「わああああああ!!い、一夏!!」

「なんだよ人の顔をみて悲鳴をあげるなんて」

「う…お前の顔がすぐ近くにあつたらびつくりもするだろう」

あ?…ああすまん。ほつとしたと同時に一夏があつさり引いたことに少し恨みがましく思いながら聞いた。

「そういう一夏は何の願い事を書いたのだ」

「俺か？俺はー、うーん、まだ考え中だ。それにしても大きい笹だよなあ」

そういつて一夏は篠ノ之神社の境内に目を向けた。

そこには、今日限定で、大きな笹の木が飾られていた。それは見る角度によっては、

昇つてきた満月の真下にまで伸びているようで、天に届くのではないかと思えた。

その笹の木に近所の人が書いた色とりどりの短冊が涼しそうにゆれている。町の広場にも笹はあるのだが、ほとんどの住人はここへ飾っているらしい。

「よくこんな大きいものが見つかったな」

「ああ、毎年雪子叔母さんの知り合いが、ご好意で持ってきてくださっている」

「すごいな。笹の家、毎年立派な笹の木が植わってるなあと思つてたんだ」

そんなによく見ていたのかと嬉しくなつた笹は胸を張る。

「篠ノ之神社は地域の人に奉仕する神社だからな。小さな行事ほど大切に行うのだ。それに昔から篠ノ之神社は七夕で有名なんだぞ」

「さすがだな。あ、商店街のおばさんの短冊があるじゃんか」

そういつてふむふむと短冊鑑賞会をし始めた一夏の横顔を笹はチラチラと盗みみていた。しかし一夏は見るのに真剣で気づいていない。それに乗じて今度はじーっと見始めた。

（な、なんかあれだな……。改めて見ると、あの頃の道場で競つていたころのやんちゃで幼い面影はあまり残つてなく、シユツとした顔立ちになり、その——格好よくなつたようだな）

そのことに嬉しさと、自分の知らない一夏が入つてることにはちよつぱり寂しい気持ち

にもなった。その時、ふと気づいた。

喉仏が動いている。

驚いて一瞬声が出そうになった。まさかあの一夏に喉仏が見えるようになるなんて。いや、この低い声はここから出ているのだ。不思議なものだな……一夏が話す度に動くぞ。これは、中学の時から始めたのか？それとも今の時期か？うう、入学したては恥ずかしくてマトモに顔がみられなかったから、気づかなかつたのだ。

一夏の喉仏を目で追っているうちに無意識で近づいていく筈、そして――

「そうだ、思い出した、筈——っておおおお?!?!」

「きやつ」

くるつと顔を方向転換した一夏は驚いて、さっきの筈のように体ごと思いつきりのけ反っていた。

「い、一夏！何度言ったらわかるんだ！顔を近づけると言っただろう！」

「いや、今度やったのはほ、筈だろうが！」

「な!?!私が悪いって言うのか……?」

そう言葉を繋げながらも頭の中では（あ——！またやってしまった……！どう考えても私が悪いのに過ちを認めなかつた……うう、素直にならなきや一夏に嫌われるってわかってるのに……！）と絶賛反省中である。

一夏は苦笑しもう一度言葉を繋げた。

「おい？ 箒？ えーとだな、セシリア達から短冊預かってきたんだよ」

「そ、そうなのか、書き方知っていたか？」

「いやなく、鈴以外書いたことなかったみたいだ。皆楽しそうに書いてたぞ」

「ほう」

そう言つて一夏は4枚の短冊を箒に渡す。

嫌な予感が箒の頭の中をよぎる

（どういうことを書いたのだろうか。あいつらの願いはなんとなく予想できるような気もするが一夏の前ではまさかそんな訳——）

ペラッ

『オルコツト家をたてなおし、好きな殿方とhappy ever afterですわ
！』

『料理のレパトリーを増やして、今度こそ想いを伝えて見せるわよ!!』

『好きな人と過ごす時間が増えますように』

『嫁と教官とずっと一緒に暮らす。異論は認めん』

『…』

（——そんな訳、あつたな。）

「あいつらすごいよな。短冊に人生の目標書きちゃうなんてなく。俺が教えてからずっと長い時間悩んでたみたいだぜ。皆好きな人いるんだな？そんなそぶりなくて全然気づかなかつたよ」

（——こいつもこいつで全く気付いてないのか…）

皆きつと、叶えたい願いと同等にと一夏にアピールすることをできるようによく考えたんだろうな…。しかし当の本人には全く通じてないぞ…。

二重の意味で呆れる筈だったが、ただ、

そこまで真つ直ぐに願えるってすごいな。

正直に思った。他の専用機持ちのライバルは、性格は違えども、一夏に、多少照れながらも積極的に好きと言う気持ち伝えてる。（ただ、相手が唐変木のため全く気付かないが）

また、恋愛に限られたことではない。4人はいつでも真つ直ぐ生きている。

それを、私は——篠ノ之箒は、好ましいと思うし、少し憧れている。そのことは本人たちに恥ずかしくてなかなか言うことはできないが。

では、私だったら何を真つ直ぐに願う？

去年まではずっと一夏についての願いだった。今もそれは変わらない。これからもずっと一緒に居たい——できたら隣で。

だが、それだけか？

：いや、違う。一夏について考える時、胸の奥にはもう一人確かに存在していた。それは、姉さん。家族と、一夏と、別れなくてはいけなくなった原因を作った張本人。それでも、

私と、一夏と、姉さんと、千冬さんが道場の隅でじゃれ合う風景が頭に浮かんでくる。千冬さんを抱きしめようとして、殴られ蹴られ、それでもへこたれずに今度は私たちの方に突進してくる―せわしない姉さんの姿が。

「一夏、4人の短冊つけるのを頼まれてくれないか？私も書く」

「おう、ペン使うか？」

「いや、自分の物がある」

「ん」

一夏が横を向いたのを確認して箒は赤色の短冊に書きはじめた。さらさらと、止まら

ずに。しかし、書き終えた瞬間に大きく一つ呼吸をした。

「…書いたぞ」

一夏に渡して横を向く。そこには、

『大切な人と一緒にいられますように』と書いてあった。

「……いい願いだ」

「た、た、大切な人っていうのはな！お、お前だけのことを指しているわけじゃなくてだな！セシリアとか鈴とかシャルとかラウラと！雪子おばさんと千冬さんとか姉さん、とか……」

そう言い終えたはいいが顔がカーツと一気に真っ赤になる筈。

（うう…恥ずかしい！やはり気持ちを素直に言うなどというのは！）

「い、いやなんでもない！あつちで新しい短冊をもらってくる！」

逃げようとした筈の手首を、

「筈！筈！！」

一夏がぎゅつと掴んだ。

「な、なんだ！わた、私になんか用か！」

「その、なんだ。俺の短冊も読んでくれないか」

「一夏…。さつき、書いてないって言ってなかったか」

「すまん、さつきは照れくさくなって嘘ついたんだ。実はもう書いて結んである」

一夏が指を指した先。

『俺にとつて大事な人達と一緒にいられますように』

そこには、昔と変わらない一夏の力強い字で書かれた短冊が揺れている。

「同じ…だったのか」

「ああ。…俺の願いは六年間これだ。ずっと箒や束さんに会いたくて、だな」

そう言つて一夏は頬をぽりぽりと搔きながら横を向いた。だが、髪の間から耳の端が赤くなっているのが見えた。

予想外、だった。一夏が、私と同じ願いをずっと持っていたなんて。一年前ぶりにじわあつと熱いものが箒の脛の裏にたまつた。しかし、一年前のそれとは全く違うものだ。あの時ズキズキと鳴つた胸の鼓動が、今では早いリズムで、だけど心地よく鳴り続けている。

ああ、これは、きつと。

（幸せつてことか——）

気づいたら自然と涙が頬を伝つた。

「おい、箒？」

一夏がびつくりした声をだした。箒自身も驚いた。

(涙を自分では止められないこともあるのだな)

それは、箒にとつて初めてのことだった。こんなすぐに感情がでるほどに、私は、今すぐく幸せなのか。そしてそう思わせてくれた一夏に伝えねばならない。

「あつ……いつ、……いちつ、」

話そうとすると嗚咽が混じつて上手くしゃべれない。

「いちかつ……………つ……」

一夏は黙つて耳を傾けている。それなのに言葉が出てこない。

「そのつ……う、うれしい……わたっしも……ずっと、ずっと、」

その瞬間箒は一夏に抱きしめられていた。

「箒、もう何も言うな。お前の気持ちは十分伝わったから」

一夏はそこまですぐいい終えると息を吸つて言葉が続けた。

「……ありがとう。箒とまた出会えてよかった」

それから枷が外れたかのように涙は止まらず目から頬まで何度も何度も零れ落ちた。その度に一夏が背中を優しくさする。嗚咽もますます激しくもれて、まるで幼子のように泣きじやくつた。

しばらく経つて箒が泣き止むと一夏がポツリと言った。

「…前にもこんな風に箒が泣いたときあったよなあ」

「え…？そうだったろうか」

「覚えてないのか。まあ確か小一の頃だからな。剣道場から帰る途中で箒が神社の階段を踏み外して、すごい勢いで泣きじやくったんだよ」

「…やはり覚えてないな」

「あの頃剣道やり始めたばかりで、箒のこと柳韻さん以外に負けないすげえ強えやつだと思つてたんだよ。だから、お前が泣いた時すつごくびっくりして、どうしたらいいのか分からなくなった。だけどその時束さんが慌ててやってきて」

「！姉さんが…」

「箒をこんな風にポンポンつてしてた」

「そう言つて箒の背中を二度軽く叩いた。」

「また、会えるといいよな…束さん」

「一夏がそつと抱きしめる力を強めた。」

「…ああ」

その時、突然神社の襖が勢いよく開いた。

「あらつ、いいところにお邪魔しちやつてごめんなさいね」

「ゆ、雪子おばさん」

その瞬間弾かれたかのように離れる。それと同時に箒はさつきまでの行動（東に会いたいつて言ったこと、一夏の前で大泣きしたこと、抱きしめられたこと、東に会いたい気持ちを認めたことなど）を思い返してしまい体中から一面に湯気が湧き出すかと思ふほど熱くなった。

（わたし…私はさつきまで何してたんだけ！しかも、雪子おばさんにこんな姿を見られるなど…は、恥ずかしいにも程がある！）

「おばさん、今日は手伝いあんま出来なくてすみませんでした」

「いいのよ一夏くん。久しぶりなんだからゆっくりしてって」

「そうは言っても…俺と箒で出来ることはありますか？」

「んー、そうねえ。低い位置にある短冊を上飾りつけするようにお願いしてもいいかしら。二人が終わるまで夕食の用意をしてるわね」

「わかりました。箒、やるぞ」

「ふ…ふん！お前に言われなくてもやるに決まってる！」

さつきまで素直になっていた反動でついツンとした態度を取ってしまう箒だった。

「いんなもんか」

うーん、と一夏が大きく伸びをする。

「う、うむ……」

低い位置で隠れてしまった短冊は意外にも多く、時間がかかった。また、一夏が『妻に浮気がバレませんように』と達筆で書かれた短冊を優しさからそのままで置こうと提案したのを箒が断固拒否して数分言い合いがあつたからでもある。

「あ！箒の短冊を飾り付けてない！」

伸びをしたまま一夏が箒の方を見る。

「え……あ、ああ、そうだったな」

「これで最後の短冊だな！どこにしまった？」

「ほら、ここにある……だが、」

「だが？」

—— 恥ずかしい。

これを飾つて多くの人にみられるのは、恥ずかしい。

箒の表情から気持ちを察した一夏は箒の手から短冊を奪つた。

「あ?!一夏何をする！」

「何もしねーよ。なあ、箒、あそこ見て」

そう言つて一夏は指を指した。

そこは、笹の木の頂上。

「あそこなら、彦星様と織姫様しか笹の願いは分からないじゃないか？」

「…っ…だが、私の手には高くて届かないぞ」

「そしたら、俺を使えばいい」

一夏はニカツと笑った。

「笹―、こんな感じか？」

「…ひ、左だ、左！」

「おう」

―― 本当に今日の私はどうしたのだ

一夏に姉さんに会いたいなどと言ってしまい、一夏にだ、抱きしめられて。しかも、今は肩車されているだと――!?!?

考えるだけで頭がショートを起こしそうになる。

「…笹?大丈夫か?さつきから黙って…」

「なんでもない!こ、今度は左に行きすぎだ!」

「了解」

こういう時は察しがいいのだな…。

呆れつつも一夏の気遣いにとでもうれしくなる。肩車をして私の短冊を飾ることも、素直になれない私に対しての一夏なりの気遣いなのだろう。

「そこだ！そのまま動かないでくれ」

「わかった」

急いで短冊の紐で結びつける。誤字のないか確認するためにちらりと見た。

『大切な人と一緒にいられますように』

やはり、すぐく真つ直ぐで照れくさくなる願い事だ。だけど、これは六年間私の本心で、そしてきつと変わらない。

それを、今日一夏が教えてくれた。こうして、今のように体を張って。私もこの行動に応えたい。ずっと、一夏やセシリア達、姉さん、その他にこれから出会う人も。

最近、私は一夏を守られてばかりの立場に焦りを感じていた。しかし、今では今までの自分が少し馬鹿らしく感じた。確かに私は、適正ランクはCでISの専用機体はない。だけど、それが何になるのだろう？きつと他のやり方は見つかるとは思わない。これからは、周りに振り回されずにこの願いをずっと持ち続けることができようように――

その瞬間、夜空に星が一個、大きな弧を描いたのだった。

二人ずつと、これからも（前編）

M o r n i n g (a . m . 5 : 3 0)

水面から思いつき顔を出した時のような勢いを感じて目が覚めた。

首を回して枕もとの時計をみる。5時半。布団に入ってからまだ3時間しか経っていない。

時差ボケなのか、はたまた夜行バスで爆睡してたのが原因か。ちつとも眠気を感じない。

目を閉じてもすぐに眠れないことは明らかだ。

「んっ……すう……すう……」

横から一か月振りに聞こえる最愛の人の声。

振り向くと箒の顔がすぐ目の前にあつた。

俺が箒の寝顔を見ることはめつたにない。箒は早起きが得意で俺が起きるともう布団から出て朝ごはんの支度をしているからだ。

そんな箒が今可愛い寝息をたてて寝ている。これは。

（これはまじまじと箒を見れるいいチャンスじゃないか？）

雪のように白い肌に柔らかそうな薄桃色の頬。上に向いた糸のように長いまつげ。あまりにも綺麗で見ただけでドキドキしてしまう。そして、紅を塗っていないのに艶やかな唇。反射的に喉を鳴らした。

寝込みを襲うのはよくないけど、そつと触れるくらいならいいよな…？

手に頬を添えた瞬間布団がもぞもぞ動き出した。これはもしかしくなくても、

「にゃーん」

シャイニイカ。相変わらず狭いところが好きだなあ。

とりあえず引つ張り出して小声でたしなめる。

「にゃあ」

『おはよう。箒寝てるからもつと静かに…』

「にゃあにゃあ」

そうしている内に箒がうつすら目を開けた。

「い…：」夏…？？」

起きてしまったか、せつかくのチャンスが…。

邪魔してきた白猫を恨みがましく思いながら、笑顔で挨拶する。

「箒。おはよう」

「おはよう…帰ってきていたのだな」

「ああ、ただいま」

この一連の会話も一か月振りだと妙に照れくさく感じてしまう。

箒も同じなのか、顔を横に向きながらもじもじと指をからませている。

俺の奥さんとってもかわいい。

「一夏…その、メールでも言ったが、モンドクロツゾ大会優勝おめでとう」

「ありがとう。長く家を空けちまって悪かったな、大変じゃなかったか？」

「大丈夫だ、雪子おばさんが手伝いに来てくれたからな。一夏の頑張りが結果として表れて私は…嬉しかったぞ」

「箒達が応援してくれたからな、頑張れたんだ。本当にありがとう」

「お…お礼を言うのはこっちの方だ。よく頑張ったな」

「おう」

照れながら純粋に結果を称えてくれる。

俺の奥さんとってもかわいい（2度目）。

「今日は日曜日だから道場も休みだ。お昼ごはんも私が用意するからゆっくり寝てていいぞ」

「サンキュ…といっても、もう目が覚めてあまり眠くないんだよな」

「いや、寝てる。寝ないと変な時間に眠くなって辛くなるのは一夏なんだからな」

「そうだよなあ…でも今朝冷えてるからな、ぬくもりがないと眠れないとかさく」
腕組みをして大げさに震えるマネをすると箒は呆れてため息をついた。

「はあ…昨日までお前が行つてたトロントの方がもつと寒いだろ！分かりやすい嘘をつくな！」

「ははっ、それもそうだな」

「全く…きよ、今日だけだからな」

そう言つて箒は腕を回して俺に全体重を預けてきた。

や、やわらけえ…。

それと同時に伝わってきた箒の体温、鼓動の音。

俺がぎゅつと抱きしめ返すと鼓動がトクントクンと速くなった。

ちらりと箒の顔を見ると真っ赤になつてうつつむいてる。なにこのかわいい生き物。

たまらなくなつて箒の髪に顔をうずめた。

「ちよっ…一夏！恥ずかしいぞ！」

「箒つてほんといい匂いするな…」

清潔なシャンプーの香りと箒自身から発せられる甘い香りが混じつた匂い。

1ヶ月しか離れてなかったのにひどく久しぶりに嗅いだ気がした。これは俺にとつ

て世界一安心する匂いだなとしみじみ感じる。

「今日だけ…今日だけだぞ…」

うつむきながら言い訳のようにぶつぶつ言ってる姿さえも愛おしい。

「一夏は結婚してからよく甘えるようになったな…」

「箒こそ甘やかし上手になったな。いい母親になるんじゃないか？」

「は、母~~~~!!」

箒の顔はさらに真っ赤になった。

「一夏……いや、今はいいか」

「なんだ箒」

「なんでもない!とにかく早く寝てくれ」

「おう、寝るまでそばにいてくれよ」

「仕方ないやつだな…」

腕を絡めたまま二人揃って横になる。

「おやすみ、一夏」

A r o u n d N o o n (a . m . 1 1 : 1 0) p . m . 1 : 0 0)

その後安心してすぐ爆睡してしまつたのだろうか。とても残念なことに、箒を抱きしめた後の記憶が一切残つてない。次に意識が戻つた時に隣のぬくもりはすでになく、時計の針は11時10分を指していた。カーテンの隙間からあふれんばかりの木漏れ日
が差し込んでいて絶好のお出かけ日和だというのが窺えた。

布団を押し入れに入れてラフな服に着替える。顔を洗いに洗面所に行くと、歯磨きする場所にメモ書きが置いてあつた。

『おはよう』

今日はいいい天気だな

お腹すいたら食卓にみかんがある

1時過ぎにお弁当を持って公園へ行こう』

その言葉通り、台所の塩こうじとしょうがの食欲をそそる香りが漂っている。

早くも鳴るお腹をなだめて、箒に聞こえるように声を張り上げた。

「箒！夕飯の買い出ししてくる！」

夕飯は試合前日にホテルで食べた料理を再現することに決めた。

七面鳥のソテー、温かいミネストローネスープ、絶妙のチーズに赤ワイン。特にソテーのがすぐくまろやかでそれでいて絶妙にハーブ効いていたあれは、思い出すだけで顔がほころぶ。最初の一口を食べたとき頬が落ちるかと思った。

箸にもできたらあの味を体験してもらいたい。

スーパーで一通りの具材を買いそろえたので最後に商店街の精肉店に向かう。途中で今朝の箸のことを思い出していた。

(本当はもっと箸がアワアワしている姿が見たかったのに…)

あのまますぐに寝てしまうなんて一生の不覚。箸はすごく恥ずかしがるから夫婦になつたつた今でもめつたに抱きしめさせてくれない。その代わり抱きしめられると大人しくなつて、いたずらしても許してくれるし、上目遣いで甘えてくれるときもある。そこが猫みたいでかわいいなと思つてたのに。せつかくのチャンスが無駄にするなんて、俺のバカ！

考えているうちに精肉店の入口までたどり着いた。

「こんにちはー」

「へいらつしやい！つて一夏くんじゃねーか！」

「おじさんお久しぶりです」

精肉店のおじさん。中学のバイト時代からの長い付き合いだ。今日も真つ赤な顔にきつちりしめた鉢巻がよく似合ってる。

「おう！昨日モンなんたら大会優勝したんだってな！おめでとさん！」

「ありがとうございます」

「はー、俺と商店街のやつらで育ててた一夏くんが世界で戦うようになるとはなあ。感慨深えなあ…今日は特別にまけてやるぜ！」

「はは、ありがとうございます。七面鳥まるごと一匹ください」

「七面鳥ね！はいよ！ちよいお待ち！」

そう言ってお店の奥のほうへ引つ込んでいった。

相変わらず83歳とは思えないすばやい動きだな。俺も健康には気を遣って80過ぎててもこれくらい元気になりたい。まあ60年後なんて今から想像つかないけどな。

「へいお待ち！鶏肉600gもおまけしといたから早いうちに食え！」

「え！ほんとですか！ありがとうございます！」

鶏肉といえばからあげ。からあげと言えば筍の作ったからあげ。

その瞬間筍のからあげの味が口いっぱいに広がって思わず涎が垂れそうになる。いかんいかん、ご飯は家帰るまでおあずけだからな、自制せねば。

そういえば。

「俺が留守にしてるとき商店街のみなさんお変わりありませんでしたか」

「いんや。相変わらず死ぬとは思えねーほど元気だよ」

「おお、聞けてよかったです」

「おうよ。ただ、お前の家の奥さんが、」

「箒が？」

「最近ここに来てなくてな。外出してる様子もあまりないってきいて、どうしたんか、病気がつって心配してってあれ…何も聞いてないのか？」

「…はい」

「そうだったのか。いやー、言っちゃまずいこと言ったか。俺なんも考えず言っちゃまうからよお。氣い悪くしたらわりいなあ」

「いえ、大丈夫です」

箒が外出をあまりしていない…？箒が病気…？

まさか、今朝見た様子だと機嫌いいし普通に体調良さそうだったぞ、少し眠そうだったけど。

それが、見間違いだったのか？

思案している俺の顔をおじさんがすまなそうにしてのぞき込む。慌てて顔をあげた。

「ちよつと家着いたら箒に聞いてみます。多分大丈夫だと思うけど」

「おう。すまんなあ」

チリンとチャイムの音がしたあと他のお客さんがお店に入って来たのでおじさん会釈して素早くお店を出る。東に向かつて歩きだそうと足を一步踏み出そうとしたその時、後ろで猫の鳴き声があった。

「にやあにやあ」

振り返ったらシャイニイが地面にちよこんと座っていた。

「よおシャイニイ。よくこんな遠くまで来たな」

「にやあにやあにやあ」

目線を合わせて呼びかけても、シャイニイはずっと一点を見つめながら鳴き続けている。壊れたサイレンのように。

まるで何かを訴えかけるように。

…もしかして。

「もしかして、箒に何かあったのか？」

その瞬間シャイニイは一目散に家のほうへ駆けていった。

嘘だろ、まさか本当に。

「まて！シャイニイ！箒！今すぐ行く！」

二人ずつと、これからも（後編）

七面鳥の持ち方以外は一切考えずとにかく走る。走る。走る。

10分くらい経っただろうか、ようやく家が見えた。

「箒!!!」

思いっきり家の扉を開ける。

そこには、台所で倒れている箒が——いなくて、その代わり布団で横たわっている箒がいた。

「一夏? どうしてそんな慌てて」

とりあえず何事もなかったようではっと胸を撫で下ろす。

「いや、なんでもない。箒こそどうしたんだ? どうして寝てるんだ?」

「昼飯作り終わった後ちよつと眩暈がしてな…台所で倒れるといけないと思って少し安静にしていただけだ、大したことはない」

そう言って頬笑む箒はいつもと変わらない様子に見えた。

「そうだったのか…でも体調悪いのなら連絡してくれよ」

「ああ、今度からする。…悪いが私と一夏の分の食事をこっちに持ってきてくれないか。

後はよそうだけだから」

「…了解」

言われた通り俺はご飯をよそるために部屋を出て障子を閉める。…が、完全には閉めないで箒を障子の隙間から観察した。

俺が出ていくと箒ははーっと小さくため息をついた。そのあと天井の一点を真剣に見つめている。さつきは気づかなかつたが顔もどこか青白い。

（まじで体調悪そうだな…）

台所にはホウレン草のごま和えにきんぴらごぼう、からあげ、カボチャの煮物にできたての味噌汁に、ほかほかのご飯があった。

「さつすが箒、俺の食べたいものを的確に当ててくるなあ」

1ヶ月和食、特に箒の手料理が食べたくてしょうがなかったもんな。お腹がぎゅるるるつと盛大に鳴った。

「お待たせ」

「ありがとう一夏。助かった」

箒が体をゆつくりと起こす。箒が食べやすいように箸でカボチャの煮物をわった。

「箒、ほれ」

「えーいや、それは…」

急に顔を真っ赤にして慌てだす箒。いやいや、なんでだよ。今までも何回かしてるのに。まあそこが箒のかわいい所だよな。

「いいじゃないか、この方が食べやすいだろ」

「うっ、それはそうだが…」

「体調悪いんだろ」

「だからもう大丈夫だって」

「じゃあ俺が好きでやることにしてくれ。はい、あーん」

そう言うとうようやく箒は口を小さく開けてモグモグする。小動物に餌をやるみたいで楽しいんだよな、これが。本人に言ったら怒られるだろうから言わないけど。

しばらく続けたあと箒が言った。

「一夏もう十分だ、ありがとう。朝に何も食べていないんだろ、お前も食べる」

「おう、じゃあいただくか」

冷めちやうし、温かいみそ汁から手をつけてって

「?!」

「一夏どうした?!」

俺が目を白黒してる間に箒が慌てて味噌汁を飲んだ。

「これは…甘い！何故だ！」

「箒……これ砂糖入れたろ……」

「あ、最後に塩をではなく間違えて砂糖を入れてしまったようだな……」

しかも甘いだけではなく……味噌のしょっぱさを砂糖が懸命に打ち消そうとしているようで、しょっぱいのと甘い周波が定期的に来る難物。ずっと飲んでたら味覚が麻痺しそうだ。

ちらりと箒を見るとしゅんとしてうなだれている。犬耳があつたら耳がだらんと垂れているに違いない。箒は、体調が悪いとだいぶ落ち込みやすくなるからな。よし、織斑一夏、男を見せろ。好きな人に悲しい顔させたくないだろ。

味噌汁を一気にかきこみながら飲み干した。

「はー、ごちそうさま」

「一夏……何をしている……」

「何って、味噌汁を全部飲んだだけだ、箒の分も飲まないならもうぞ」

「あ……」

箒の手から味噌汁を取って全部飲み干す。うーん、未知の味だ。

「ふう……ちそうさま、これだけでお腹いっぱいだな」

「おい……」

さっきの申し訳なさ純度100%だったのが変わって、申し訳なさそう半分、俺への

呆れ半分になったようで満足する。

ふとなつかしい思い出がよみがえった。

「どうしたんだ、急ににやけて…」

やばい、いつの間にか顔に出てたのか。正直に告白する。

「はは、高校時代に箒が作ってくれた味なしチャーハンのことを思い出しちまって」

「なっ！あのまじかつたチャーハンか！うう…もう忘れてくれ！」

「まずい？箒、俺はお前の料理をまずいなんて思ったことは一度もないぞ」

戸惑った顔になる箒。それには構わずに続ける。

「だって箒はいつも真心こめてつくってくれるからな。まずいわけがないだろう」

その瞬間箒はまた真つ赤な顔に戻った。めちやくちや照れている。やめろ、こつちま
で照れるじゃないか！うーん、確かに考えてみればキザな台詞だったかもしれない。で
も、これは本当のことなんだよな。だとしてもこの変な空気があふれる場をどうにか和
ませねば。

「あ、ありがとう…本当にやさしいな一夏は…」

「おう。また作ってくれよ、味なしチャーハン」

「それは余計だ、馬鹿！」

あ、失敗したみたいだ。

e v e n i n g (p. m. 16:10)

「わあやはりここは見晴らしがいいな！」

「だなー」

その後箒が体調良くなったからと言うので、近くまで散歩しようと、花火がよく見える例の場所に来ていた。周りの紅葉の木々の葉は紅に色づき始めている。それらを夕焼けが照らしていて、なんとというか幻想的だ。この場所でたわいのない会話をするものなんて楽しいことか。やっぱり箒のそばが一番安心する。

でも、気がかりなことが一つある。

それは、箒の体の具合について、だ。

箒が体調を崩すことはめつたにない。3年暮らしていて分かったことだが箒は超健康優良児だ。いや、子供ではないか。ともかく、箒は毎日朝6時には目覚めて朝稽古をしたあと篠ノ之神社の仕事に従事する。夕方になったら道場に通う子供たちを指導し、夕食を食べ入浴した後10時半にはもう床に着く。食事も3食自炊して栄養バランスにも気を遣っている。この文句のつけようのない生活習慣の前では、どんな病原菌も菌

が立たないだろう。

さらにおかしいのが、精肉店のおじさんが言っていた「病氣」「あまり出歩いていない」という話が箒の口から出てこないことだ。さっきから箒がする話というのが、近所の方からお裾分けでもらった物、道場の子の上達具合の話ばかりで、この一か月の箒自身について何も語られていない。もしかして、箒は俺に何か隠し事を…。

「一夏、もうしばらく休んでいかないか」

「そうだな」

ハッ！（※ここでベートーヴェンの「運命」が流れる）

もしかして。箒は、未知のウイルスに感染してしまったのではないだろうか。俺がいなくなつた後突然倒れて救急車で運ばれる箒。医者に宣告された不治の病。だけど心配かけまいと俺の前ではバレないようにいつも通りに振舞つて。しかし一か月後再度倒れてしまい、伝えられなかった愛の言葉。

なんだって、そんなのはいやだ！絶対阻止せねば！

「あの」

俺と箒の声がぴたりと重なつた。

「あ、悪い。なんだ箒？」

「い、いや大丈夫だ。お前からでいいぞ」

「ん、いや、箒からで」

「いや一夏からで」

ああ、これ以上は引き下がれそうにない。さあ織斑一夏、覚悟を決めて箒から真実を引き出すんだ。

「じゃあ箒、聞きたいことがある。それはお前の体の具合についてだ」

「！どうしてそれを…」

箒が大きく目を見開いた。

「俺が夕食を買いにいつもの精肉店に行ったらおじさんに言われたんだ。箒が最近店に來ない。近所の人も、箒があまり出歩いている様子を見ていないって。…その話、さっきからの話で出てこなかったよな。箒、俺になにか隠してないか？重病だとか…」

これ以上は言うのがはばかられて口を閉じた。

箒は俺の話に目を閉じてじっと聞き入っていた。言い終わった後も沈黙が続いた。実際数秒だったかもしれないが、俺には数分のように感じられた。

「箒…？」

俺が呼びかけると、箒は目を再度開いた。なにかを決心したような目つきをしていた。た。

「一夏、今から話すことをよく聞いてくれ」

自分の胸に手を置くと心臓の鼓動がどんどん速くなっているのが分かる。耳を塞ぎたくなるのをグツとこらえてうなずいた。

「ああ、聞かせてくれ」

「一夏……お前が出国して一週間後に分かったことだが……私の体に」

「一夏との子供が出来たようだ」

………え？

「気づくきっかけになったのは眩暈だった。今ではそうではもないが一か月前はもう尋常じゃないぐらいクラクラしていた。それでまさか……と思って雪子おばさんに相談して産婦人科と一緒に行ったんだ。したらなんと陽性反応が出たんだ。計算すると今日で妊娠8週間らしい……だけどお前に心配かけ、きやつ！」

気づいたら箒を思いつきり抱きしめていた。こういう時なんて言ったらいいのか全く分からなくて。が、箒が刻む鼓動の音が俺の心を満たして……あれ？目からなにかが、

「一夏……」

箒が俺の目から溢れたものをゆつくりとなぞった。あ、これは。

涙か。これが涙か。泣いたこと今までなかったからピンと来なかった。涙って悲し

い時だけではなく嬉しい時にも出るんだな。これに気づかせてくれたのも、箒が。

「ありがとう箒……うれしいよ……」

そしてごめん。感情が収まりそうにないからしばらくこのままでもいいさせてくれないか。

「一夏……もう大丈夫か……？」

「ああ、すまん」

箒の衝撃の告白から俺は箒を抱きしめて、……そしてずっと涙が止まらず心配した箒に頭を撫でられていた。こんな体験初めてでとても恥ずかしい。

「よかった……さっきの話の続きをしないか？」

「あ、俺遮ってたのか、本当にすまん……！」

「いいんだ。それでだな、私を感じてた眩暈は、妊娠した最初に感じる痛みらしい。いわゆるつわりって言うやつだ。今はたまにだが、これがこの一か月毎日続いていて、雪子おばさんにほぼ毎日食事つくってもらっていたのだ。だから商店街はおろか、外出もままならなかったって訳だ」

「……そうだったのか」

とりあえず重病が俺の杞憂だったことは間違いないで心底安心した。それにしても。「俺が父親になるのか」

言葉にしてもまだ実感が湧かない。もちろん箒と結婚する前から覚悟は決めていたし、結婚してからも個人的にそれ関連について情報を集めたりはしていた。それなのに、箒がこんなに大変な思いをしたのを話してくれているのに、全くというほど信じられなかった。

ふと記憶の断片が頭の中にちらつく。

光のない真つ暗な部屋。山積みになっておかれたコード番号表。隣に「特殊」とかかれた試験管。大人たちの冷たい目線の数々と殺意。そして――
次々と思い出される記憶を辿っていく内に一つ確信してしまった。

(そうだ、俺は普通の家族ってものを知らない)

「どうした…？ 難しい表情をしているぞ」

箒が俺の頬をつねった。

その手の温かさでハッと我に返った。

「箒…いや、なんでもない」

「なんだ、……もしかして家族のことか？」

…箒はなんでもお見通しだな。

「…ああ。俺は今まで千冬姉がいたけど、マドカのこともあつたし…箒に子供ができてすごく嬉しいのに不安になってしまった」

俺、今どういう表情をしているだろう。顔の筋肉が固まっとうまく話せない。

「一夏…」

箒は目を細め、俺の髪を優しく触った。

「心配するのはよく分かる。だが、私はこう思うのだ」

「人一倍優しく頼れるお前だから、私は家族になりたいと思ったんだ。わ、私が頼りがいのない男を選ぶ訳がないと知っているだろう！だから一夏の今までの境遇を知っていても何も不安ではない。お前も少しずつでいいから不安を捨てて」

そう言うとき箒は一呼吸を置いた。

「この子の命を受け止めてくれないか？」

箒は俺の手を掴んで自分のお腹に押し当てた。そこには小さい鼓動の音が存在していた。それに気づいた瞬間、先ほどまで止まっていた涙がまた大粒になってあふれ出す。

ぼやけはじめた視界の端で箒が微笑をたたえているのが見えた。

「完璧な家族ではなくても、これから少しずつ思い描く家族になっていけばいい。まだまだ私たちの人生先は長いんだ。そうだろう一夏？」

…ああ、もう。

箒が言うのと全てその通りのような気がするから不思議だ。

でも実際その通りなんだろう。

俺の奥さんが箒で本当に良かった。

「そうだな、箒、これからよろしく頼む」

Untitled (前編)

手首につけた時計の長針は、ついに12を指した。

それを確認して、箒は大きくため息を吐いた。

「…来ない」

ぼつりとつぶやいたその一言は、雨上がりでじめじめした空き地に大きく響いた。そこへ強い風が舞い込み、ピクツと体を震わせる。昼間では気にならない風の音もかなり大きく聞こえた。

真夜中の2時ちょうど。箒は、外灯もなく薄暗いここでただ一人佇んでいた。

なぜそんなことをしているのか？それは箒自身にも分からない。同じ道場の門下生から、今日の午前1時半、この空き地に来るように呼び出されたのだ。数日前、9歳になつたばかりの箒にとって、こんな時間帯まで起きていることは滅多にない。いつもは毎朝五時からの朝練のために9時前には寝ている。こんなに長く起きていたのは初めてのことだった。

(わたしは一体ここで何をしているのだ…)

箒は、昨日から今日までの経緯を振り返った。

経緯といつても、これしか思い当たることがない。

遡ること数時間前。

箒は篠ノ之神社境内裏の植え込みの後ろで一人体育座りをしていた。そこは、箒からの小学生が二人くらいしか入れないような狭い場所で、箒は何かあるとよくここに来ていた。家の神社に帰れば、姉がすぐに駆け寄ってくるが、ここでは一人になれる秘密の場所だった。

そこで、箒には珍しく何度もため息を吐いていた。

「はああ〜」

箒がこうなっている理由。

それは、さっきの放課後の出来事だった。

分担された場所の清掃が終わったので教室へ戻ろうとしていた時。

「アハハハハ」

教室の掃除が終わらないのだろうか。同級生の笑い声が廊下まで響いていた。それに構わずランドセルを取りに教室の引き戸に手を伸ばしかけた。しかし、

「しのののさんっ×○△だよね〜」

教室の中で名前が呼ばれるのが聞こえた。慌てて引き戸から手を離す。心臓をバクバクさせながら、耳を澄ましてみると。

「あー、たしかにー」

「しののののって名字、珍しいよねー」

「めいけだもんねー」

「めいかだよ(笑)。だから、他に聞いたことないよねー」

(これを聞いていていいのだろうか…)

立ち聞きしていることになんとなく後ろめたいような気持ちになり、ここから立ち去ろうとしたその瞬間だった。

「いや、それよりよおー。あいつの名前の方が変じゃね?」

「え、なんで?」

「名前が『ほうき』だぞ。オレが今手にもってんとおんなじじゃん。こんなん人の名前じゃねーじゃん」

「ごみとほこりくつついてるんだぜ。きつたねえよなー。他に名前なかったんかよお」

「うわー男子サイテー」

「でもわかっちゃう。かわいいそうだよねー」

「んー。あたしだったら気にして学校いけなーい」

「アハハハハ」

箒は文字通り固まった。

「つてかさー、そんなこといつてるけどさー。男子さー、しのののさんのことゼツタイ好きでしょー」

「みんな知つてるよー。いつもめっちゃ見てるよねー」

「つつはあ!??ば、ばば、ばかじゃねーの!オ、オレがあんな男女のこと、す、すきとか!ありえねー!!し!」

「そ、そうだぞ!あ、あんなやつす、すきじゃねーよ!」

後半の言葉はもう箒の耳には入らなかった。思い切り引き戸を開けると、驚いて真っ青になった同級生には目を合わせず、自分の席へゆきランドセルを背負うと、同級生が声をかけるより前に教室から小走りで行き、今に至っている。

「はあああああ〜」

箒の口から海よりも深いため息がこぼれた。

箒も自分の名前がなんでこの名前なのか考えたことがない訳ではなかった。むしろ、

よく考えていた。自分の名前はかなり変わっている。

「どうして箒って名前をつけたんですか？」

あるとき意を決して母さんに聞いたときの悲しそうな顔は忘れられない。

だから、今までずっと、自分の名前については考えないようにして。今日までずっと忘れていた。だが、さつき。自分以外の人からそれが語られたことで、あのときに考えた、感じたことが一気に箒の頭を駆け巡って、頭から離れない。

(ええい！何を弱気になっている！わたしらしくないぞ！)

『常に、己に一本の剣筋があることを意識しろ』

これは、常に父さんが箒に投げかける言葉だ。

それを思い出し、目を閉じて木刀を心の中でイメージして手を握ってみたがいつものような力は、沸いてこない。

(どうしてしまったというんだわたしは…)

もしかして、誰かに言ってみたら心が晴れるだろうか。

一瞬、脳裏に兎耳の姉の姿がよぎるが、すぐに心の中で頭を降った。

(……………ダメだ。このことを、万が一姉さんに話したら、すごく怖いことが起きそうな予感を感じる…。でも、どうしたら——)

「しなのの?」

「わあ!？」

頭上から急に声が降ってきて、心臓が止まるほど驚いた。

しかし、声の正体が分かって一瞬詰まった息がゆるむ。

「なんだ、おりむらか」

おりむら。

去年から姉の千冬さんと共に篠ノ之道場に入門してきた同じクラスの男子。ほぼ毎日一緒にいるが、仲良いとは言えない。というより、箒は、おりむらがなんとなく苦手だった。箒から見たら、おりむらは超絶マイペースで、脳天気。厳しくて優しい千冬さんにいつも怒られている印象しかない。

特に、剣道をしている時にそれを感じる。

剣道を始めた頃こそ、強くなつては来ているが、まだおりむらは箒の技量に及ばない。それでも、毎回悔しそうな顔をして「明日はおれが勝つ!」と毎日飽きずに勝負をしかけてくるのだ。おりむらが、そうしてくる理由は箒にとって理解しがたいことだった。

どうして毎日負けると分かっているのに勝負を持ちかけてくるのか。

………いや、おりむらのことだから、本気で勝つと思ひ込んでいるのかもしれない。

どちらにせよ、箒には一夏の真意は分からずじまいで、自分と違う何かがあるおりむらに少し嫌悪感を抱いていたようだ。

だから、箒はおりむらには道場以外では極力距離を置いていて、自分から声をかけるということとはしなかった。だというのに。

「なんだってなんだよ。おれじゃ悪いかよ!」

こいつはいつもうるさいと感じるほど話しかけてくる。

心の中で、新しくため息を吐くと、おりむらの方へ顔を向けた。

「…特に意味は無い。何か用か?」

「特に用はねえけど。なんでこんな暗いところでコソコソしてるのかなと思ってさ」

「コソコソなどしてないっ」

顔をそむけながら急いで立ち上がろうとした箒の隣におりむらが座る。

「まあまあ、落ち着けよ」

「なっ!なんで座るんだ」

「いや、いいじゃん。ここ座る場所あるし。お前今あれなんだろ、」

真剣な面持ちで言葉を続けた。

「腹がいたくなつて動けないんだろ」

「ち、ちがう!そんなヤワではない!」

「なんだ、ちがうのか。じゃあ、アレか。頭が弱いとか？」

「だからそんなにヤワでは——これ以上言うと、殴るぞ？」

「右手をグーにしてきよーはくするなよ……」

そう言われ、口をとがらせたまま手を膝に置いて顔を伏せた。

「すまん……。つい手が……」

「気にすんなよ。冗談はおいてといて、何か悩み事があるんだろ？おれで良ければきくぞ」

「なぜ分かる……」

「そりゃ見てればわかるさ。しののののことは毎日見ているからな」

「う……でも、」

（こいつには、こういった悩み事とは無縁だろ……でもせつかく言ってくれてる訳だし……いや、でも、あの「おりむら」だぞ？あいつは筋金入りのバカではなかったか？そんなやつに……）

また気づかぬ間にぐるぐるの悩み始めた筈は気づかなかったが、おりむらは急に立ち上がった。

「そうだ!!今からおれは、ここにある庭の植え込みだ!いくらでも話しかけて良いぞ!」

大声を出し、両手を広げて固まった。

「……………は？」

突然の行動に思わず箒の口から低い声が出た。それに対して、珍しく反応がない。

「いや、どうということなのだ…」

困惑した声を出しても、無反応のままだ。

本人の言う通り、植え込みを演じているのか。

試しに腕をツンツンしてみると、少し顔をムツとした顔になったが、それでも声に出そうとしない。

「こんなわざとらしい植え込みがあるものか…」

考えてることはよくわからないが、これは彼なりの気を遣った結果なのだろう。

箒は、観念して、顔を植え込み（らしきもの）にそむけながら話し始めた。

「あのな、これは言っておくが……………たいしたことではない。わたしの名前が、その、みんなと違うのが気になってだな…」

そこに植え込みがぼつり。

「…しののこの下の名前ってなんだっけか…」

「いや、そこからののか!?!わたしの名前はほうきだ!」

つい立ち上がり、大きな声でツツコミを入れた。だが、植え込みは黙ったままだ。

なんなのだと思いつながら元の体勢に直るが、自分もおりむらの下の名前が思い出せないことに気がつく。

（なんだっけか…いちがついたような…?…は!?これではわたしも同レベルではないかっ）

焦つたのを隠そうとして、箒は少しわざとらしい咳払いをして話をつづけた。

「わたしは、自分の名前が…、両親が名付け、姉さんが呼んでくれる名前ではあるが…、心底嫌だと感じることもあるのだ…どうしてわたしにこの名前をつけたんだろうか? だっておかしいだろう? ほら…掃除道具の名前ではないか…どうして…って大丈夫か!?」

チラリと目を向けたら、植え込みはいつのまにかうなだれていた。表情を読み取ろうとしたが、長い前髪がそれを邪魔している。口が小さくモニュモニュと動いているが、それもさっぱり分からなかった。

戸惑いながら見ていると、おりむらはすごい早さで顔をあげた。その表情は今までみたことないほどキラキラしている。

「よし!しのの!今夜、こっから10分の踏切近くの空き地に集合な!」

「は!?お前何を言ってる、」

「集合時間は、午前1時半。遅くて午前2時だな!じゃあ道場に戻ろうぜ!。そろそ

ろ戻らないと、千冬ねえに叱られちまうしさ」

「いや、待て！どうしてそうなったのか、わたしに説明し——」
箒の声は、おりむらの言う通りで、遠くから聞こえる千冬さんの大きな怒声で遮られた。

「一夏！箒！稽古時間はとつくに始まつてるぞ！どこにいる!!」